模倣的表象としてのユートピア

——Thomas More の場合——

渡　辺　明　敏

I

二十世紀も世紀末を迎えた今、古典的手法に依ってユートピアを描く事は殆ど不可能な情況となっている。にも拘らず、或いはそれ故にと言うべきであろうか、ユートピアに関する研究は益々盛んである。これは、「ユートピア的なるもの」への深い洞察なくして西洋文明史の解釈は困難であり、ヨーロッパ文学、とりわけ英文学の研究にとってユートピア願望に対する正しい理解が不可欠である、との認識の現れである。しかし研究の現場において、地道な努力の積み重ねにも拘らず理論面での深化が見られないのは残念なことである。ユートピア願望とは何か、という根本的問いに対し満足すべき解答は未だ与えられていない。J. C. Davis の設定した類型も決定的なものとは言い難い。そこで本稿では、René Girard の模倣的欲望の理論によってユートピアを模倣の観点から類型化し、ユートピア願望理解の一助としたい。そしてその理論的枠組みを使用して、イギリス・ユートピア文学の原点というべき Thomas More の Utopia を分析し、理論の有効性を検証する。

II

ジラールにとって、人間の欲望は常に他人の欲望の模倣である (Girard, *Mensonge* 12-13)。欲望を発現させるのは対象ではなく、その対象を欲望の対象として主体に指し示す他人である。ジラールはこの他人を、主体と対象を仲介する者という意味で媒体 (médiateur) と名づけるが、この媒体の欲望を模倣

することによってはじめて主体は対象への欲望を持ち得る。その際主体は媒体が欲望するのと同じ物を欲望の対象とするので、不可避的に主体と媒体の間に同一対象をめぐって敵対的競争関係が発生する。欲望のモデル・手本であった媒体は今やライバル・障害とならざるをえない。

このように欲望は常に暴力へ転化する潜在性を秘めているが、暴力もまた欲望に劣らず模倣的である。その模倣的暴力が一つの集団全体を捉えるとき、すべての成員がそれぞれ自余の成員に敵対する社会的カオスが現出する。相互的暴力と呼ばれるこの絶望的状況は、模倣作用によって暴力の強度を増大させながら悪化の一途を辿るが、それは殆ど奇跡的とも言える巧妙なメカニズムによって一気に解消される。それがスケープゴート殺害による秩序の創造である (Girard, *La Violence* 116-118)。

集団の任意の成員が恣意的に犠牲(victim)として選ばれ、全員の暴力によって殺害される。そしてそれによって集団に秩序がもたらされる。その際秩序は暴力とは別の場所に生み出されるのではなく、暴力の行使がそのまま秩序創造行為となる。これまで互いに向けて無秩序に発散されていた暴力が秩序づけられて一点に集中すること、即ち暴力の「全員一致性」、が社会秩序そのものなのである。

暴力を発散してカタルシスを得た集団は、当初悪の根源と思われた犠牲が結果的に平和と秩序をもたらした恩恵者であることを悟り、彼を神に祀って崇拝する。同時に暴力は共同体から遠ざけられてタブーとされ、それによって日常的文化秩序が可能になる。そしてかつての殺害行為が供犠の儀礼として周期的に反復され、暴力が日常性に再侵入するのを防止する安全弁の役割を果たす (Girard, *La Violence* 368)。

上のシナリオは次の四つの概念に纏めることができる。1．模倣的欲望、2．相互的暴力、3．全員一致の暴力、4．文化秩序。

ユートピアにとって欲望が根本的契機であることを考える時、ジラールの欲望理論がユートピア理解の為の基本的視座となることが期待される。又、暴力、秩序も、特定のタイプのユートピアにとっては本質的構成要素を成している。そこで、上の四つの概念は、ユートピアの諸類型を設定するための極めて有用

な装置となり得ると思われる。しかしそれらをこのままの形でユートピアの類型として使用することは出来ない。ジラールが描くシナリオの各段階は時間の流れに沿って現れる通時的な観念であるが、ユートピアの類型を作り出すためには我々はそれを模倣に関わる共時的観念に組み換えなくてはならない。以下、順序に従って、それぞれの段階を模倣の諸形態を表すカテゴリーへと変換していく。

第一番目の「模倣的欲望」は対象への欲望の模倣によって生ずる欲望である。注意すべきは、それがナルチシズムという現象を含むことである。一般に対象への欲望とナルチシズムは相対立する概念と考えられているが、ジラールが明らかにした様に、両者は基本的に同一の機制に依っている (Girard, *Des choses* 391-405)。ナルチシズムも欲望の一種であり、他人の欲望の模倣からのみ生まれる。媒体の欲望が主体自身を対象とするとき、主体は媒体の欲望を模倣して自分自身を欲望する。主体は他人から欲望の対象としての価値を認められて自分自身の価値を肯定することが可能となり、その結果大きな充足感を得る。このようにナルチシズムは、他人から愛されることによって自分を愛することができる幸福な状態を意味する。そしてその究極的形は神の愛の対象となることから生じる至福の享受である。

そこで模倣の第一の形態として「対象的欲望」のカテゴリーを設定し、その下位区分を「狭義の対象的欲望」と「ナルチシズム」とする。

次に「相互的暴力」の概念からは「地位への欲望」というカテゴリーを抽出する。主体が媒体を模倣して対象を欲望すると、今度は媒体が主体を模倣して一層強く対象を欲望する。この相互模倣のプロセスによって両者の欲望は加速度的に亢進して行くが、ある点を超えると対象の獲得は意識の背景に退き、相手に打ち勝つ事の方が重要になる。そして遂には相手の優越的地位を暴力的に奪うことが唯一の目標となる。この「地位への欲望」も又模倣的であり、主体と媒体との相互模倣によって増幅される。

ジラールの「相互的暴力」はその欲望が社会全体を捉えたカオス状態を指すが、我々の「地位への欲望」は、社会的場面のみならず個人間の敵対においても、模倣が優越的・支配的地位を目指す形態を表す。

第三の「全員一致の暴力」はそのまま模倣のカテゴリーとして使用できる。そこでの模倣は、極限的に高められた攻撃性を放出するにあたり、各人が自己の主体的判断ではなく、他人の決定の機械的模倣によって犠牲を選択することを意味する。その際選択の客観的妥当性は問題とされない。全員の暴力に対し、最小のコストで何等かの捌け口が与えられることだけが重要なのである。ジラールの場合、全員一致の暴力によって殺害あるいは追放・排除されるのは人間や動物等に限定されるが、ユートピア論においてはそれ以外に、暴力・欲望・貨幣など抽象的原理や制度などをも含める必要がある。それによって「全員一致の暴力」という観念の適用範囲を拡大することができる。

では第四番目として、暴力が排除された後に可能となる「文化秩序」はいかにして模倣のカテゴリーに転換されるであろうか。ジラールは、文化秩序が供犠の儀礼によって維持されることを示すにとどまり、それ以上は議論を深めていない。特に、日常生活世界で模倣がいかなる役割を果たすかは明らかにされていない。ジラール理論の弱点の一つと言える。我々はこの理論上の間隙を M. Eliade の「祖型の反復」によって補完する (Eliade 30-48)。ジラールの文化秩序の具体的内容をなすのが、神話的原型の反復であることによって意味づけられた世界、というエリアーデの観念であると考えたい。これによって、日常生活世界の模倣的性格が明らかになる。そこでは一回限りの出来事は無意味・無秩序の領域に属し、モデルを模倣・反復することによってはじめてひとは意味ある行動をとることができる。ただし、模倣されるのは欲望・暴力であるよりはむしろ、さまざまな行動が準拠すべき範例的な「型」である。

以上を踏まえて、「祖型的行動の模倣」を模倣の第四の形態とする。これでジラールのシナリオの四段階はすべて模倣のカテゴリーに変換されたことになる。

III

次に模倣の四つの形態にいかなるユートピア類型が対応するかについて述べたい。

1．模倣の第一の形態「対象的欲望」にはユートピアの「楽園」類型が対応する。

a．楽園とはまず「狭義の対象的欲望」が充足される場所である。その欲望の対象には飲食物、性的対象、生活上の不可欠なもの、便利なもの、快適なもの、すべてが含まれる。これらの対象が欲望されるのは、それらに内在的価値が具わっているからではなく、媒体＝他人がそれらを欲望の対象とし、主体がその欲望を模倣するからである。では楽園に於ける媒体とは誰か。その答えが作品中に明示されることはない。しかしそれは作者が意図的に隠蔽するからではない。欲望の模倣は多くの場合無意識の過程であり、作者自身媒体の存在を明確に意識化できないからである。作者は対象が内在的価値を持つと考えてその対象を楽園の構成要素として描くが、実は、彼の同時代人、特にその対象を独占的・排他的に享受する特権的人々が欲望するのを模倣して作者もその対象を欲望するのである。そして彼は自分の欲望を彼が仮構した楽園の住人に模倣させる。

楽園に関わる模倣はこれに尽きない。楽園の住人の欲望を模倣し、楽園への欲望に駆られる「探求者」はこの類型に欠かせない登場人物である。そしてその探求者の欲望を今度は読者が模倣して楽園への願望を掻き立てられることになる。このように楽園への欲望は終始一貫して模倣的である。

対象をめぐる主体と媒体との三角関係において、欲望が加速度的に亢進するのは主体と媒体の相互模倣によるのみならず、競争相手に対して募る敵意が対象の客観的価値の高さとして錯覚されるからである。楽園探求への欲望がいや増しに高められるのも、「障害」が生み出すフラストレーションの鬱積が対象の上に重ね合わされ、「至高の価値」の幻影を生み出すからである。楽園を侵入者から守る障害は単なる物理的困難ではない。楽園の住人も他の媒体と同じく、探求者の欲望を暴力で妨害する。住人が探求者に揮うその暴力を暗喩的に表現するのが、「危険な旅」、「高い壁」、等の困難性を表す諸イメージである。この様に、楽園にとって障害が不可欠な道具立てであることは、模倣的欲望の暴力性の観点によってはじめて妥当な説明が与えられる。

b．欲望の対象が主体の自我そのものである「ナルチシズム」には独自の楽

園が対応する。それは媒体の究極的形である神によって愛される場としての楽園である。キリスト教における Paradise、Hesiod の黄金時代がその代表例である。神が主体に向ける愛の模倣によって自分自身を愛することができる至福の状態、それがナルチシズム的楽園の意味するものである。

ナルチシズムは貪欲な欲望であるので神の愛だけでは満足せず、誰からも愛されることを求める。その為それは周囲への「無関心」を装う。なぜなら外界への無関心こそが自己充足状態の標徴であり、欲望すべき対象としての価値の証しだからである (Girard, *Des choses* 393-394)。しかし対象が余りに隔絶した価値を持つことは、かえって主体の欲望を沮喪させる。そこでナルチシズムは無関心が装われたものでしかないことを微かに仄めかし、その自己充足性のほころび目から模倣的欲望を誘い込んで主体を籠絡しようと試みる。ナルチシズム固有の戦略であるこのコケットリーの結果、ナルチシズム的楽園は「手が届きそうで届かない」微妙な遠隔性と蠱惑的な表情とを与えられることになる。

2.「地位への欲望」に対応するユートピアは「さかさまの世界」と「平等主義社会」である。

a. 地位への欲望は媒体の優越的地位を模倣し、それを奪い取ろうとする。既存の上下関係を逆転させるこの欲望を形象化したものが「さかさまの世界」である。そこでは主体個人、或いは彼が所属する被支配者階級が上位に立ち、これまで権力の座にあった媒体ないし彼が所属する支配階級が零落して辛酸を嘗める。古代イスラエルの預言者、そして中世ヨーロッパの千年王国論者が描いたユートピア像の主要な部分はこの類型に属する。

さかさまの世界はその様な社会的・政治的階層の逆転のみならず、物理的上下関係の逆転、性的役割の逆転、価値体系の逆転など様々なヴァリエーションを有する。また、社会的逆転をもたらすのも物理的・肉体的暴力に限定されず、笑いという知的・精神的メカニズムによる場合もある。あらゆる笑いに攻撃性が伴うか否かは議論の別れるところであるが、少なくともある種の笑いにとって攻撃性は本質的要素である。嘲笑によって格下げされた者の哀れな状態を描写する「風刺」はユートピア文学の不可欠な構成員である。

b. さかさまの世界と一見矛盾するかに思われる「平等主義社会」もまた地

位への欲望に基く。主体と媒体との激しい闘争は相互に地位を奪い合う過程を反復し、その結果誰も永続的に優位を保てない「差異の消失」状態を生み出す（Girard, *La Violence* 86）。平等主義社会はそうした状態をユートピア化したものである。平等主義は非暴力の外観を装うが、その根底にあるのは激しい相互暴力であり、他者に対して必死に優位を保とうとする主体同志の間に講じられた一時的な調停策である。

3．「全員一致の暴力」に対応するのは「悪を排除する秩序」、即ち「善き秩序」のユートピアである。この類型のユートピアが書かれる背景を成すのは、暴力をタブーとする意識が薄れ、社会全体が暴力に汚染された危機的状況である。社会の各成員は他の成員の暴力に対抗するため攻撃性のポテンシャルを著しく高めた状態にある。ユートピア作家も決して例外ではなく、社会に蔓延する暴力に対する敵意を募らせる。ただしユートピアンは彼の暴力性を他の成員と同じ物理的・肉体的形式で発散するのではなく、精神・理性に立脚点を置き、暴力や欲望を思想的に否定するスタンスをとる。重要なのは、彼の思想上の営みが反暴力の立場からのものであるにせよ、その反暴力を情念的に支えているのはやはり一種の暴力性であり、しかもその暴力性が社会一般を覆う暴力の模倣に由来する事である。ユートピアンの暴力性が一般の暴力とは次元を異にすることを認めた上で、その共通性もまた正しく認識されなくてはならない。

ユートピア作家は自らの反暴力的暴力を、全員一致で暴力を排除するユートピアのイメージによって表現する。その排除は生身の人間の殺害（暴力的犯罪者の処刑）だけでなく、暴力、欲望、貨幣、無知、無為などを「悪」の原理として否定する事をも含む。そこにおいて重要なのは何を排除するかではなく、何であれひとつの標的に向けて暴力が発散されること、しかも全員一致で発散されることである。全員一致の暴力は、犠牲選択の際の相互模倣によって心情的な一体感を生み出す。従って「善き秩序」のユートピアとは「暴力による連帯」のユートピアなのである。

4．「祖型的行動の模倣」には「異文化の模写」のユートピアが対応する。人間社会、特にアルカイックな社会が行動の規範を求めて神話を模倣・反復するのと同じく、この類型のユートピアは文化秩序のモデルとして祖型的な異文化

を模倣する。手本とされる秩序には次のようなものが考えられる。a．同時代の外国社会、b．自社会あるいは外国社会の過去の状態、c．架空の社会（他の作家によるユートピアを含む)、d．社会的動物の行動様式、そして、e．四季の規則的な変化などの自然的秩序、等がユートピアのモデルになる。

人間社会の範囲を越えて秩序のモデルを求める傾向が極限にまで至ると、幾何学的秩序を模倣するユートピアが生まれる。幾何学的図形は、1．直線性、2．対称性、を主な特質とするが、直線は自由な曲線と比べて模倣し易く反復が容易である。対称的図形は部分の反復によって構成されており、それ自体において模倣的である。この直線性と対称性とを兼ね備えるのが都市の碁盤の目構造である。それに準ずる形である同心円構造とならんで、碁盤の目構造がユートピアンによって偏愛される秩序であるのは、まさにその模倣的特性による。

IV

ユートピアを諸類型に分類するための基準はユートピアに向けられる関心のあり方に応じて変化し得るものであり、唯一絶対的な基準が存在する訳ではない。しかし、人間の欲望や行動様式に立脚点を求める限り、その本性である模倣性の諸形態に依るのが最も妥当な基準であり、同時に最も興味深い知見をもたらすものであると思われる。

ところで、上述の四つのユートピア類型は謂わば「理念型」とも言うべきもので、それを純粋に体現した作品は希である。ある特定の作品にはどの類型の要素が支配的で、どの類型の要素が副次的なものに過ぎないかを指摘し得るのみである。とりわけ More の Utopia は内容の総合性が大きな特徴となっているので、単一の類型の枠を押しつけることは避けなくてはならない。以下、類型の順序に従って検討してゆく。

1．通常 More の Utopia は楽園的ユートピアとは対立するタイプの作品に分類される。そしてその扱いは概ね妥当である。しかし同時に楽園の性格をあわせ持つことも事実であるので、先ずそれを指摘することから始めなくてはならない。

a．Utopia は物質的に恵まれた場所という印象を強く与えるが(238)、その意味するところは、Utopia が一種の楽園として描かれていることである。極端な贅沢品は許されないが、生活に必要なもの、便利なもの、快適なものには事欠かない。そうした物質的豊かさへの欲望は、当時の中産的階層の欲望を模倣した作者がそれを Utopia 人に模倣させたものである。同時にそれは Utopia の諸隣国や Hythlodaeus などの訪問者、そして最終的には読者の模倣的欲望を挑発する。その挑発を効果的なものにし、Utopia への願望を掻き立てるために、その欲望の対象は次のような障害によって接近が困難にされている。Utopia 人は平和主義者であるが軍備に無関心ではなく、特にその港は、自然の浅瀬や岩礁のみならず守備兵によって外部からの侵入に対して防衛されている (110)。Utopia は元来半島であったが、初代の王 Utopus は掘削工事によって陸地から切り離し、独立した島に変えた(112)。ヨーロッパ人にとっては、Utopia が赤道の彼方に位置づけられることにより、接近の困難は極大化されている(108)。これらの障害が、楽園的ユートピアへの接近を妨害する住人の暴力を象徴するものであることは前節で述べた通りである。

b．Utopia が楽園的であることは、神に愛される場所というナルチシズム的特性からも言える。Utopia が神の恩恵を豊かに受ける国であることは、第二巻の宗教に関する部分で強調されている (236)。More がその部分を書いたとき、Paradise にあって神の恩恵を一身に集めた Adam のことを念頭に置いたであろう事は想像に難くない。Utopia 人は全巻を通じて幸福な人々として描かれているが、彼等の最大の幸福は、神に愛され、それによって自分自身を愛し得ることにある。神の Utopia 人に対する愛は純粋に精神的形のみならず、Utopia の優れた社会制度、そしてそれが保証する物質的豊かさという形でも表わされる (236)。後者は、ナルチシズムの充足以外に狭義の対象的欲望の充足をも同時に与える。

2．次に、Utopia は明らかに「さかさまの世界」であり、同時に「平等主義社会」でもある。

a．Utopia 人の制度、物の考え方の多くは当時のヨーロッパ人のそれを倒立させたものである。ヨーロッパ人が戦争に明け暮れするのに対し、Utopia 人は

平和を愛好する (198-200)。ヨーロッパ人が学問に無関心であるのに対し、Utopia 人は学問を何よりも愛する (126-128)。ヨーロッパ人が私利の追求に狂奔するのに対し、Utopia 人は公益を優先する (236-238)。ヨーロッパ社会が私有に基づく社会であるのに対し、Utopia では共有制が行われている (100)。ヨーロッパ人が金・銀・宝石類に最高の価値を認めるのに対し、Utopia 人はそれらに見向きもせず、奴隷の鎖、便器など卑しい目的のためにのみ使用する (152)、等々。

Anemolii 人の外交官が金の装身具を見せびらかして奴隷と間違えられ、Utopia の子供にさえ馬鹿にされる有名なエピソードは、風刺、即ち笑いによる逆転の典型的な例である (152-154)。

b. Utopia は一種の社会的ヒエラルキーを有するので厳密な意味での平等主義社会ではないが、当時のヨーロッパと比較するならば平等への志向が極めて強い社会と言える。世襲の特権階級は存在せず、男女間の性差別も大変少ない。服装は簡素で全員同じ形のものを着用する (126)。こうした平等主義的傾向は、地位への欲望の欠如を示すものではなく、誰も永続的に従属的な地位に甘んずることが無いように、各人の地位への欲望を相互に均衡させた結果に過ぎない。暴力的形での表現を禁じられた Utopia 人の地位への欲望は、社会的名誉・学問的卓越という比較的無害な形式へ導かれ、そこに捌け口を見出す (130-132)。

3. 上述の如く、Utopia には楽園の側面とさかさまの世界の側面が紛れもなく存在するが、支配的なのは第三の「善き秩序」、即ち「悪を排除する秩序」の要素である。Utopia は悪の排除の原初的方式である犠牲の殺害を犯罪者の処刑という形式で保持している (124, 190)。死刑制度の存在は何か「非ユートピア的なこと」ではなく、第三の類型にとっては本質的要素に属する。

犯罪者等の生身の人間以外で Utopia 人が悪として排除するのは、先ず貨幣及びそれのへの欲望である (240-242)。貨幣への欲望は対象的欲望の最も完成された姿である。貨幣は具体的有用性を捨象することによってすべての人間の模倣的欲望をそそり、しかもそれは限度を知らない。この貨幣を排除することによって成り立つのが Utopia の共産主義的秩序である。

Utopia 人は禁欲主義を実践し、肉体的な欲望・快楽を悪として排除する。一

般論として禁欲主義と楽園性とは両立し難いが、Utopia の場合には、正しい快楽と誤った快楽との間に厳格な区別を設けることによってその矛盾を回避している。即ち、誤った快楽は正確に言えば快楽ではなく、それを禁欲したとしても楽園的幸福はいささかも損なわれない、と（160-172）。

Utopia から排除される欲望で最大のものは superbia（＝高慢心）である。superbia とは「必要もないのに、ものをみせびらかして他人を凌ぐのを栄誉と考える」（138）悪徳であり、我々の用語で言えば優越的地位への欲望に相当する。superbia の排除は中世神学の常套句を機械的に反復するだけのものではなく、周到な計画の下に配置された最も重要なモチーフの一つと考えなくてはならない。

Utopia は平等主義的ではあるが、それを否定する要素も無視できない。Utopia では学問が大いに尊重されるけれども、裏返して言えば学問のない者・無知な者は貶められ蔑まれることになる。Utopia は無知な一般大衆を排除することによって成り立つエリート社会である。Utopia 人にとって学問はそれ自体実践的有用性を持ち、かつ精神的快楽の源泉でもあるが、社会学的には、知識を所有する者としない者とを区別する手段として機能している(132)。

Utopia は又、貴族の無為と貧者の無為とを共に排除する勤勉な者の秩序である。Utopia 人は学問のために余暇を使うことには大変高い価値を認めるが、何もせずに時間を浪費することには極めて厳しい態度をとる（128-130）。

この様に Utopia は悪の排除によって秩序づけられた世界であるが、その排除行為の模倣性は Utopia の住人が「全員一致」してその排除に参加することに表わされている。同時に、その排除の暴力は作者の属する 16 世紀 England 社会に蔓延していた一般的暴力傾向を模倣的に反映している。勿論 More は単純に暴力で暴力に対抗しようとした訳ではなく、自らの暴力性を精神の濾過作用によって社会批判へと昇華させている。だがその「批判」という行為は暴力のとる一つの特殊な形態に他ならず、彼が模倣的暴力の作用に否応なく巻き込まれざるを得なかったことを示している。

4．ある意味ですべての文学作品は他の作品の模倣であるが、ユートピア文学の場合は特にそれがあてはまる。模倣の手本となるものには狭義のユートピ

ア作品のみならず、哲学的著作、歴史書、宗教書などあらゆるジャンルの著作が含まれる。More は彼の *Utopia* を著わすにあたって多くの著作から「影響」を受けたと言われるが、影響という文学概念は普遍的な模倣現象の特殊例に他ならない。ここでは More が影響を受けたとされる祖型的「異文化」を含む著作を列挙するに止める。先ず Plato の *Republic*、Aristotle の *Politics*、Plutarch の *Parallel Lives* 特に Lycurgus に関する部分、Tacitus の *Germania*、Amerigo Vespucci の *Four Voyages*、等。

Utopia の各都市は「四角形」の城壁で囲まれ、碁盤の目構造を成していたと考えられるが (120)、それは *Politics* で言及されている Hippodamus の都市計画を模倣したものであろう。

V

我々はユートピアの四つの類型を設定し、More の Utopia をそれに沿って分析したが、それはユートピアの構成素材を成す欲望や暴力のあり方を示すにとどまり、ユートピアをユートピアたらしめるもの、四つの類型に共通する「ユートピア性」の本質を未だ明らかにするものではない。そこで最後に、ユートピア願望とは一体何であるかを、やはりジラール的視点から明らかにしたい。

その出発点となるのは、ユートピアが様々な欲望に関わりながらも、欲望の充足ではなく、その挫折から生まれるという基本的事実である。欲望が充足されているところではユートピアは無用である。しかし、欲望の充足に失敗した者にも幾つかの選択肢が残されている。一つは再度欲望の充足に挑戦することであるが、その試みが成功する保障はなく、永遠に失敗を繰り返す結果に終わるかもしれない。別の選択肢は、媒体に取り憑かれてその奴隷となった状態を何等かの方法によって克服し、そこから脱却することである。なぜなら、欲望の挫折がもたらす苦悩と悲嘆は主として媒体への隷属に由来するからである。そしてその隷属から解放される方法のひとつが自分自身を媒体と「同一視」することである。

その際主体が同一視する媒体は自分以外に媒体を持たない究極的媒体でなく

てはならない。さもなければ主体は以前と全く同じように媒体への隷属に苦しまなくてはならない。究極的媒体は自分自身をモデルとするので他者に従属する必要もなければ他者に敗北を喫する虞もない。その様な自己模倣的存在が享受する完結性を「自己充足」と呼ぶとすれば、そうした自己充足的な存在になる事によって主体は媒体への隷属が課する苦しみから逃れることができる。しかしながら、主体にはその様な存在となるための現実的能力は欠けている。そこで主体は自らを自己充足的存在と空想的に同一視し、非現実の世界で自己充足的存在となるのである。

主体の究極的媒体との同一視はひとつの空想でしかないが、ではその究極的媒体自体は実在するであろうか。勿論そのようなものは実在しない。だからその究極的媒体もまた想像によって作り出されねばならない。あるいは現実の不完全な存在をその様なものと思い込まなくてはならない。一旦そうした思い込みが成立すれば、主体にとって絶対的なリアリティを獲得する。通常「理想」と呼ばれるのはこうして作り出された想像上の自己充足的存在のことである。それは人物の場合もあれば、抽象的観念の場合もある。そしてユートピアの如きひとつの空間的イメージでもあり得る。

人は現実的に自己充足的存在になることは不可能なので、自己充足的理想像と自分自身とを同一視することによって疑似充足を得る。模倣が誰それ「の如く」欲望したり行動したりすることであるのに対し、同一視は端的に自分は誰それ「である」と思いなすことである。発達心理学的に言えば、同一視は模倣の最も原始的な形態である。

これを要するに、ユートピア願望とは、模倣の呪縛から逃れるために、自己充足的な空間イメージと自分自身とを同一視する原始的模倣のことである。

VI

Moreの生きた時代はヨーロッパ社会において伝統的タブーが打ち破られ、模倣的欲望・暴力が生の形で露になりつつある時代であった。Moreはそうした欲望・暴力の大波に翻弄されつつ、その克服のために理想社会を構築した。彼

の Utopia は理想社会のイメージとして一応の自己充足性を付与されていたが、果たしてそれは彼にとって真の意味での理想であっただろうか。More はルネサンス期の多くの知識人と同じく Plato を手本と仰いだが、*Utopia* の執筆も Plato の *Republic* を模倣する試みとしてなされた。恐らく More にはその模倣に成功し Plato を凌駕し得た、との自負もあったであろう。にも拘らず Utopia は彼にとって究極的理想たり得なかった。逆説的な言い方になるが、More が Utopia を描いたのは、それが究極的理想ではないこと、究極の理想は他にあることを示すためであった (Surtz 7)。

More の究極的理想はイエス・キリスト以外にない。キリストのまねび "imitatio Christi" が彼の最終的言葉である。この観点からすれば、若干の Utopia 人がキリストの教えに帰依したという記述は中心的重要性を持つ (216-218)。イエス・キリストを模倣する Utopia 人を模倣せよ。これが *Utopia* によって More が伝えようとしたメッセージである。

More が *Utopia* を書いて後、イギリスのみならずヨーロッパ各国において様々な言語でユートピア文学が書かれることとなったが、その際 More を意識せずにユートピアを描くことは不可能であった。近代的ユートピアはすべて More の *Utopia* を模倣して書かれたといっても過言ではない。そして多くのユートピア作品が書かれれば書かれるほど *Utopia* の中心的メッセージたる "imitatio Christi" が忘れられて行ったのは歴史の皮肉というほかはない。

引用文献

Davis, J. C. *Utopia and the ideal society*. Cambridge : Cambridge University Press, 1981.

Eliade, Mircea. *Le mythe de l'éternel retour*. Paris : Gallimard, 1969.

Girard, Riné. *Des choses cachées depuis la fondation du monde*. Paris : Bernard Grasset, 1978.

———. *La Violence et le sacré*. Paris : Bernard Grasset, 1972.

———. *Mensonge romantique et vérité romanesque*. Paris : Bernard Grasset,

1961.

More, Thomas. *Utopia*. Ed. Edward Surtz, S. J. and J. H. Hexter. New Haven: Yale University Press, 1965. Vol. 4 of *The Complete Works of St. Thomas More*. Gen. ed. Louis L. Martz et al. 15 vols. 1963- .

Surtz, Edward. *The Praise of Wisdom*. Chicago: Loyola University Press, 1957.

Synopsis

Utopia as a Mimetic Image

By Akitoshi Watanabe

René Girard's theory of mimetic desire and violence provides a useful frame of reference for classifying Utopian literature. His scenario of the creation of social order postulates four fundamental mimetic impulses ; objectal desire (including narcissism), desire for dominant positions, violence which culminates in the unanimous killing of a victim, and imitation of mythical archetypes.

On the basis of these impulses, we propose four types of Utopia ; Paradise, the Inverted World (and the Egalitarian Society), the Good order, and the Simulacrum of Model Societies. Each type represents a specific kind of mimesis. Paradise is a place where objectal desire and narcissism, which are both intrincically mimetic, are fully satisfied. The Inverted World symbolizes the equally mimetic desire to appropriate others' social positions. The Egalitarian Society also embodies the same desire. The Good Order is created by unanimously removing social evils. The unanimity results from the mutual mimesis in deciding which evil to remove. The Simulacrum of Model Societies copies past and/or present social organizations (including imaginary ones). It is driven by the compulsive urge to imitate archetypal models.

Thomas More's Utopia is a composite of these four types. Firstly, it is depicted as a civilized paradise. The inhabitants enjoy not only material abundance but also spiritual felicity derived from being loved by their supreme god. Secondly, it

is an inverted world where dominant values in More's times are turned upside down. Utopians' sheer contempt for gold and precious stones is the best-known instance. Egalitarianism in Utopia is a modified form of the inversion of existing social hierarchy. Thirdly and most impotantly, Utopia is a good order purged of all kinds of social evils ; violence, money, false pleasure, the sins of pride and sloth, etc. The unanimous purge ironically taints the ideal society with the mimetic violence which it tries to banish. Lastly, Utopia imitates several model societies, such as Plato's *Republic* and Sparta in Plutarch's *Parallel Lives*.

Is there a common feature of the four types which constitutes the definition of Utopia ? When one has failed in the attempt to fulfill his mimetic impulses, he can escape the agony of subjection to his models by imagining himself as a self-sufficient, omnipotent model. Utopia is an image of a space with whose self-sufficiency a frustrated person identifies himself.

We conclude by suggesting that More did not intend to propose his Utopia as the final goal. His actual intention was to exhort the Europeans to imitate Christ, whom some of the pagan Utopians were open-minded enough to imitate.